

学会掲示板



企画室

(1) 第4回水-岩石反応討論会 1983年8月29日-9月3日 於鳥取県三朝

この集会は岩石と熱水が反応して生ずる現象を各分野の専門家がそれぞれの立場から研究し 境界領域の問題を考え 研究を進展させようとするものである。今回は外国から約150名 国内約100名の参加があり 非常に盛会であった。会は2つの招待講演 在米大本洋教授の黒鉱鉱床 荒牧重雄教授の日本のカルデラで始められた。主テーマとして「水-岩石反応におけるカイネティクス(19) 現世熱水系(31) 熱水鉱化作用(19) 有機物質反応(7)」がえられ その他は マグマ過程における水(6) 地殻運動による流体発散(5) 変成作用における水(9) 塩水問題(4) 風化過程と続成作用(9) 水-岩石反応における同位体(10) ウランの移動(4) 実験的手法による水-岩石反応(9) 海水-岩石反応(12) 地下水の化学(12) 有機物質反応(7)などである。()内は発表件数であるが これによって水-岩石反応課題における世界の研究の流れを汲みとることができよう。

この会は 分野が異なる地球科学者が 水-岩石反応と言う共通点のみにひかれて その必要性を認めて3年に1回集まろうとするもので その魅力が失われた時には中止する独特のものである。したがって常に将来に向けての研究動向が打出され 得がたい会合と言える。今回のカイネティクスの分野もそのあらわれである。当所からは6講演をおこなった。

今会合は三朝温泉と言う地の利を得て 完全に日本式旅館に外国人を日本人とをミックスした形で宿泊が行われ 宿舎側の親切な対応と合せて国外参加者には非常に好評であったようである。会の運営も国内外参加者にバランスよく配慮され 国内で行われる国際学会にふさわしいものであった。岡山大学温泉研究所酒井均教授をはじめとし 関陽太郎教授 大本靖博士 その他の国際感覚が豊かな人々による運営のたまものであろう。

会期に大韓航空機事件と言う不幸な出来事が生じ ソ連参加者に気を使いながら西側出席者からの質問をうけた。また 規約を作って国際学会の下部組織にしようとする現執行部が 自由な討論会である現状を守ろうとする大多数の出席者によって猛反撃をくらった連絡昼食会などが印象に残る。今回は1986年にアイスランドで

行われる。

(2) 実験地学に関する地調セミナー

上記会合参加者からペンシルバニア州立大学の実験地学研究者の C. W. BURNHAM 大本洋両教授 V. J. WALL 博士(現オーストラリア モナーシュ大)の3氏を招き講演と自由討論の会合を地質調査所で開催した。

バーナム講演は実験的に 花崗岩質マグマは原物質の角閃石 黒雲母 白雲母の含有量とそれぞれの安定度の相違により種々の花崗岩系列を生じ それぞれに特徴ある鉱床区を生成する点を強調した。結晶分化作用におけるメタル濃集の重大要素として マグマの含水量と温度 メタル Cl S濃度と fO_2 などを指摘し 各種メタル Cl Sなどについてメルト/水溶液相間の分配を議論した。Sn Wがフッ素化合物として濃集する可能性には否定的見解を示した。

ウォール講演はオーストラリアのパーアルミナス花崗岩("Sタイプ")の定量的岩石学的研究を総括し 花崗岩中に含まれる Al 珪酸塩鉱物 苦鉄鉱物の安定領域の検討から 20km+付近に発生したこのマグマの発生から固結に至る成因論を展開した。大本講演は熱水過程における実験地学上の問題点を指摘し 金鉱床を例に近年話題となっている その運搬濃集機構に関して総括し 鉱物沈澱時の fO_2 に関して O(酸化)型 R(還元)型の幅広い範囲があることを示した。

9日(土)にはニュージーランドのブラットナー博士による苦鉄質岩中の高 Cl アパタイトの講演会を開催した。

(3) アメリカ合衆国地質学会ペンローズ討論会：9月5日-9日 ワシントン州ベルリントン市

ペンローズ討論会は アメリカ合衆国地質学会主催のもとに毎回特定のテーマを選び その問題に関して現在トップレベルの研究を行なっている専門家を世界中から選抜招集して開かれる国際会議である。

今回のテーマは "Blueschists and the related eclogites" で 12カ国80人余の研究者たちによって活発な議論がくりひろげられた。日本人参加者は8名 当所からも1名がこの討論会に参加した。

討論会は (1)世界の高压型変成帯の地域ごとの概説 (2)合成実験 理論解析及び天然の岩石の研究による岩石形成条件の議論 (3)高压型変成帯の時代論と地球発達史的意味 (4)高压型変成帯形成のテクトニックモデルの4つのセッションから成り 未発表の最新研究成果が多く紹介された。また会場講演のほかにも多くの研究が毎夜ポスターセッションによって発表された。

(学会予定表は毎年1月号に掲載する予定です)